『文選集注』江淹「雑体詩」訳注（二）

陸平原（羈宦）機

重野　宏一

01 儲后降嘉命　　儲后　嘉命を降し
02 恩紀被微身　　恩紀　微身に被る
03 明発眷桑梓　　明発に桑梓を眷み
04 永歎懐密親　　永歎して密親を懐う
05 流念辞南澨　　念いを流めて南澨を辞し
06 銜怨別西津　　怨みを銜んで西津に別る
07 駆馬遵淮泗　　馬を駆りて淮泗に遵い
08 旦夕見梁陳　　旦夕に梁陳を見る
09 服義追上烈　　義を服いて上烈を追い
10 矯迹廁宮臣　　迹を矯げて宮臣に廁る
11 朱黻咸髦士　　朱黻は咸く髦士にして
12 長纓皆俊人　　長纓は皆な俊人なり
13 契闊承華内　　承華の内に契闊し
14 綢繆踰歳年　　綢繆して歳年を踰ゆ
15 日暮聊総駕　　日暮に聊く駕を総び
16 逍遥観洛川　　逍遥して洛川を観る
17 徂没多拱木　　徂没して拱木多く
18 宿草淩寒烟　　宿草　寒烟を淩ぐ
19 □子易感愾　　□（遊）子　感愾し易く
20 躑躅還自憐　　躑躅して還た自ら憐む
21 願言寄三鳥　　願わくは言を三鳥に寄せん
22 離思非徒然　　離思　徒然に非ずと

［押韻］

○身・親・津・陳・臣・人（上平声十七真）
○年・川・烟・憐・然（下平声一先）

［校勘］

羈宦　「羈宦」〈校勘各本〉
07 **駆馬遵淮泗**　「馳馬遵淮泗」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・建州本〉
09 **服義追上烈**　「服義追上列」〈校勘各本〉
17 **徂没多拱木**　「徂役多拱木」〈陳八郎本・明州本・秀州本〉
18 **宿草淩寒烟**　「宿草凌寒烟」〈尤刻本・胡刻本・国子監本〉「宿草陵寒烟」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉
19 **□子易感愾**　底本は「遊」字を欠く。今、〈校勘各本〉に従って補う。「遊子易感慨」〈明州本・秀州本〉
20 **躑躅還自憐**　「躑躅還自憐」〈校勘各本〉

［訳］

太子はありがたい命をお降しになり、その厚い恩情をこの卑しい身にも被った。明け方に故郷をふり返りながら出発し、いつまでも歎きつつ親しい人々のことに想いをめぐらした。

念いを留めつつ南の岸で別れを告げ、怨む心を抱いて西の渡し場で離別した。馬を駆けて淮水と泗水に沿って行き、朝に夕に梁と陳の地をながめた。

私は道義を行ってすぐれた人々のあとを追い、足を挙げて宮中に入り臣下となった。赤い膝覆いをつけるのはみな選ばれた人であり、長い冠のひもを垂れるのはみなすぐれた人である。承華門の宮内で勤め励み、穏やかに数年を過ごしていった。

ある日暮れ、私はしばしの間、手綱を結び馬を休ませ、ぶらぶらと歩きながら洛水のあたりをながめた。すると墓のあたりには抱えるほどの大きさの木が多く立ち並び、古根の草が冷ややかなもやの中に伸びていた。こんなものを見ると旅人というものはすぐに心を動かされやすいもので、何度も行き悩んでは我が身を憐んだ。どうにかしてあの三羽の鳥たちに託したいものだ、故郷を離れたこの思いは尋常ではないのだと。

【陸平原（羈宦）機】

陸善経曰、晋書云、成都王表機起為平原内史。

陸善経曰わく、晋書に云う、成都王　機を表し、起して平原内史と為す、と。

［訳］

陸善経はいう、「『晋書』に、『成都王は陸機をとりたてて平原内史に起用した』とある」と。

［注］

①晋書云…　陸機の伝は、現行『晋書』（房玄齢撰）巻五十四に見え、それによれば、「時成都王穎推功不居、労謙下士。機既感全済之恩、又見朝廷屢有変難、謂穎必能康隆晋室、遂委身焉。穎以機参大将軍軍事、表為平原内史。（時に成都王穎、功を推りて居らず、労謙して士に下る。機既に全済の恩に感じ、又た朝廷屢しば変難有るを見、穎必ず能く晋室を康隆せんことを謂い、遂に身を委ぬ。穎　機を以て大将軍軍事に参ぜしめ、表して平原内史と為す）」とある。しかし、陸機「平原内史を謝する表」（『文選』巻三十七）題下の李善注に引く臧栄緒の『晋書』に、「成都王表理機、起為平原内史。（成都王　表して機を理め、起して平原内史と為す）」とあり、ほぼ同様の文であることから、陸善経の引用は臧栄緒の『晋書』によるものであると考えられる。なお、清・湯球輯『九家旧晋書輯本』（楊朝明校補、中州古籍出版社、一九九一年）も同表の李善注から輯佚している。

②成都王　司馬穎（西晋、武帝、咸寧五年〔二七九〕～西晋、恵帝、光熙元年〔三〇六〕）。字は章度。武帝司馬炎の第十六子、恵帝の異母弟、懐帝の異母兄にあたる。成都王として王朝の重鎮であったが、のち八王の乱に加わった。永寧元年（三〇一）、斉王司馬冏の挙兵に応じ、趙王司馬倫を滅ぼ

した。斉王失脚後、鄴に帰り、大将軍・都督中外諸軍事となった。太安二年（三〇三）、河間王司馬顒とともに長沙王司馬乂を討ち、翌年に入京して丞相となり、再び鄴に帰り、自ら皇太弟として立った。そして陸機を殺し、権勢を振った。建武元年（三〇四）八月、幽州都督王浚および并州刺史司馬騰らに大敗し、長安に送られて皇太弟位を廃された。翌年七月に配下の公師藩らが挙兵し、一時的に復権を果たしたが、東海王司馬越に敗れ、翌年五月に長安から逃亡を試みるが捕らえられ、鄴に送られて范陽王司馬虓の保護下に置かれた。同十月、司馬虓が急死すると劉輿は紛争の根元を断つため、詔と偽って司馬穎を処刑した。伝は『晋書』巻五十九。

③**平原内史**　平原は、現在の山東省聊城県から河南省徳州市にかけての一帯をさす。内史は、首都及びその近辺の県を管理する長官。姜亮夫氏『陸平原年譜』（上海古典文学出版社、一九五七年、後に『姜亮夫全集』二十二巻、雲南人民出版社、二〇〇二年、に収む）によれば、陸機が任ぜられたのは太安元年（三〇二）七、八月の間こと。

0102【儲后降嘉命　恩紀被微身】

李善曰、漢書、疏広曰、太子国儲副君。琴操、史魚曰、思竭愚志以報塞恩紀。潘岳河陽県詩曰、微身軽蟬翼。

音決、儲、音除。被、皮義反。

銑曰、儲后、太子。機為太子洗馬。言太子之恩被於己也。

李善曰わく、漢書に、疏広曰わく、太子は国儲副君なり、と。琴操に、史魚曰わく、愚志を竭くして以て恩紀に報塞せんと思う、と。潘岳の河陽の詩に曰わく、微身　蟬の翼よりも軽し、と。

音決に、儲は、音除。被は、皮義の反、と。

銑曰わく、儲后は太子なり。機　太子洗馬と為る。言うところは太子の恩　己に被るなり、と。

［校勘］

○**潘岳河陽県詩曰**　潘岳河陽詩曰（「県」字無し）〈校勘各本〉

［訳］

李善はいう、『漢書』に、疏広が『太子は国君の後継者である』といっている。『琴操』に、史魚が『このつまらない志を十分に尽くして君（衛霊公）の厚い恩情に報いたいと思う』といっている。潘岳の河陽の詩には、『しがないこの身は蟬の羽よりも軽い』とある」と。

『音決』には、「儲の音は除、被は皮義の反」とある。

張銑はいう、「儲后は太子のことである。陸機は太子洗馬となった。つまり、ここは太子の恩恵が自分にも及んだという意味である」と。

［注］

①**漢書疏広曰…**　『漢書』巻七十一「雋疏于薛平彭伝」（疏広伝）に、「太子外祖父特進平恩侯許伯以為太子少、白使其弟中郎将舜監護太子家。上以問広、広対曰、太子国儲副君、師友必於天下英俊、不宜独親外家許氏。（太子の外祖父の特進平恩侯許伯、以て太子少しと為し、白　其の弟の中郎将舜をして太子家を監護せしむ。上　以て広に問ひ、広対えて曰わく、太子は国儲副君なり、師友は必ず天下の英俊に於いてし、宜しく独り外家の許氏に親しむるのみなるべからず）」とある。「国儲」「副君」ともに、国君の後継者、皇太子の意。

②**琴操史魚曰…**　『琴操』巻下「諫不違歌」に、「時蘧伯玉執清廉之節、修仁義之方、史魚乃薦伯玉於霊公。公曰諾、其後不用。史魚得（復）入曰、臣聞抱玉朝君、不如貢賢。夫国危者則思仁、思安者則急賢。公何嫌疑。霊公謂史魚以庭褒虚飾、良久乃応之。史魚出、謂其子曰、我思竭愚志、以報塞恩紀、薦蘧伯玉於公、公以我言為不信、将自殺以明之。我死後勿斂、用伯玉乃斂。（時に蘧伯玉　清廉の節を執り、仁義の方を修めしに、史魚乃ち伯玉を霊公に薦む。公諾と曰うも、其の後用いず。史魚入るを得て曰わく、臣聞く、玉を抱えて君に朝するは、賢を貢するに如かず。夫れ国危きときは則ち仁を思い、安きを思うときは則ち賢を急ぐ。公何ぞ嫌疑せん、と。霊公史魚の庭褒を以て虚飾すと謂い、良や久しうして乃ち之に応ず。史魚出でて、其の子に謂いて曰わく、我れ愚志を竭くして、以て恩紀に報塞せんことを思い、蘧伯玉を公に薦むるも、公我が言を以て不信と為す、将に自殺して以て之を明らかにせんとす。我れ死して後斂むる勿かれ、伯玉を用いなば乃ち斂めよ、と）」（以上、平津館叢書本に拠る）とある。　史魚は衛霊公に賢人である蘧伯玉を推挙したが、公は厚く用いようとしなかった。度重なる諫言も聞き入られなかったため、その息子を呼び「私は生前公の恩情に報いるため、賢人である伯玉を推挙したが、聞き入られず、公は私を信用なさらない。こうなっては自ら命を絶ち、その恩を明らかにしようと思う。私の死後、亡骸はすぐに礼式にのっとった棺桶に安置せず、伯玉が任用されてからにせよ」と遺言した。これに似た話は『孔子家語』困誓篇にも見えており、これらはいずれも『韓詩外伝』（巻七・二十一章）の説話に基づく。「恩紀」は、恩愛の情、いつくしみ。

③**潘岳河陽詩曰…**　「河陽県の作　二首」（『文選』巻二十六）に、「微身軽蟬翼、弱冠忝嘉招。（微身　蟬翼よりも軽く、弱冠にして嘉招を忝なくす）」とある。

④**太子洗馬**　太子洗馬は、秦・漢よりはじまり、太子の外出時の先導をつとめ、天子の謁者に相当する官。晋では太子の図書、講経、釈奠などもつかさどるようになった。『晋書』陸機伝に、「太康末、与弟雲俱入洛、造太常張華。……張華薦之諸公。後太傅楊駿辟為祭酒。会駿誅、累遷太子洗馬・著作郎。（太康の末、弟雲と俱に入洛し、太常張華に造る。……張華之を諸公に薦む。後に太傅楊駿辟きて祭酒と為す。駿の誅せらるるに会し、累ねて太子洗馬・著作郎に遷る）」とある。

0304【明発眷桑梓　永歎懐密親】

李善曰、陸①機贈顧彦先詩曰、眷言懐桑梓。又赴②洛道中作詩曰、嗚咽辞密親。永歎見下注。

李周翰曰、明③発、言発夕至曙也。歎息懐密友近親。

李善曰わく、陸機の顧彦先に贈る詩に曰わく、眷（かえ）りみて言（ここ）に桑梓を懐う、と。又た洛に赴く道中の作の詩に曰わく、嗚咽して密親に辞す、と。永歎は、下注に見ゆ、と。

李周翰曰わく、明発は、夕より発して曙に至るを言うなり。歎息して密友近親を懐うなり、と。

［校勘］

○**陸機贈顧彦先詩曰**　「陸機贈顧彦先曰」（「詩」字無し）〈校勘各本〉

○**永歎見下注**　「又永嘆遵北渚」〈建州本〉

○**言発夕至曙也**　「言発夕至曙」（「也」字無し）〈校勘各本〉

［訳］

李善はいう、「陸機の「顧彦先に贈る」詩に、『振り返って故郷のことを思い浮かべる』とある。また「洛陽に赴く道中での作」の詩に、『咽び悲しんで近親の人々に別れを告げる』とある。永歎は、下注に見える」と。

李周翰はいう、「明発は、夕方から明け方に至るまで（の時間）をいう。そして歎きながら親友や近親の人々のことを思うのである」と。

［注］

①**陸機贈顧彦先詩曰…**　陸機「尚書郎顧彦先に贈る 二首」（『文選』巻二十四）其二に見える。また、『毛詩』小雅「大東」に、「睠言顧之、潸焉出涕。（睠（かえり）みて言に之を顧み、潸焉（さんえん）として涕（なみだ）を出す）」と見え、「睠」（「眷」に同じ）は、『毛伝』が「睠、反顧也。（睠は、反顧なり）」と注するごとく、振り返って見ること。「言」は虚詞であるが、鄭玄は「言、我也。（言は、我なり）」と説く。「桑梓」は、『毛詩』小雅「小弁」に、「維桑与梓、必恭敬止。（維れ桑と梓とに、必ず恭敬す）」とあり、古くは家の敷地に桑と梓を植えたことから、故郷の家、故郷、父母の意に用いられる。

②**赴洛道中作詩曰…**　陸機「洛に赴く道中の作 二首」（『文選』巻二十六）其一に見える。「密親」は、親密な人、近親の人。五臣（劉良）は「密、猶近也。（密は、猶お近のごときなり）」と注する。

③**明発**　明け方、夜明け。『毛詩』小雅「小宛」に、「明発不寐、有懐二人。（明発まで寐ねられず、二人を懐う有り）」とあり、『毛伝』は「明発、発夕至明。（明発は、夕より発して明に至るなり）」と注しており、李周翰の注はこれを踏まえている。

0506【流念辞南澨　銜怨別西津】

李善曰、陸①機赴洛道中詩曰、永歎遵北渚、遺思結南津。杜預左氏伝注曰、澨、水涯也。

音決、澨、音逝。

呂延済曰、津、度口也。

李善曰わく、陸機の洛に赴く道中の詩に曰わく、永歎して北渚に遵い、思いを遺して南津に結ぶ、と。杜預の左氏伝の注に曰わく、澨は、水涯なり、と。

音決に、澨は、音逝、と。

呂延済曰わく、津は、度口なり、と。

［校勘］

○**杜預左氏伝注**　「杜預左氏伝」（「注」字無し）〈尤刻本・胡刻本・秀州本〉〈明州本〉はこの注無し。

○**呂延済曰津度口也**　「済曰澨水涯也津渡口」（「也」字無し）〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

［訳］

李善はいう、「陸機の「洛陽に赴く道中」の詩に、『長いため息をついて北の渚に沿って進み、別れの思いを残して南の渡し場で交わした』とある。杜預の『左氏伝』の注には、『澨は、みぎわのことである』という」と。

『音決』には、「澨は、音は逝」とある。

呂延済はいう、「津は、渡し場のことである」と。

［注］

①**陸機赴洛道中詩曰…**　前出、陸機「洛に赴く道中の作二首」其一に見える。「遵」は、李善は「遵、循也。（遵は、循うなり）」と注する。「遺思」について、李善は、秦嘉「婦に贈る詩　三首」（『玉台新詠』巻一および『古詩記』巻十四、所収）其三に、「何用叙我心、遺思致款誠。（何を用てか我が心を叙せん、思いを遺りて款誠を致す）」とあるのを先行用例として引く。但し、ここでの「遺」は、残す、留める、の意であろう。また、この「遺思」は、「雑体詩」本文の「流念」に対応する語であるから、「流」をそのまま「ながす」の意に解するのは相応しくない。これについて、清・朱駿声『説文通訓定声』（孚部第六）には、「流」が「留」の仮借であるという説を提示しており、用例としては古く『周易』繫辞伝上に、「旁行而不流。楽天知命、故不憂。（旁行して流まらず、天を楽しみて命を知る、故に憂えず）」とあるのをあげている。したがって、ここではそれを典拠として「流」を「留める」の意に解する。なお、仮借としてのその他の用例については、高亨氏『古字通假会典』（斉魯書社出版、一九八九年）七四八頁を参看。

②**杜預左氏伝注曰…**　『春秋左氏伝』成公十五年「秋八月、葬宋共公。（秋八月、宋の共公を葬る）」の条の伝「則決睢澨、閉門登陴矣。（則ち睢の澨を決し、門を閉じて陴に登る）」の杜注に見える。「澨」は、水際、堤防。また、『楚辞』九歌篇

「湘夫人」に、「朝馳余馬兮江皐、夕済兮西澨。（朝に余が馬を江皐に馳せて、夕に西澨に済る）」とあり、王逸は「澨、水涯也。（澨は、水涯なり）」と注する。

0708【駆馬遵淮泗　旦夕見梁陳】

李善曰、毛①詩曰、駈馬悠々。陸②機従□（梁）陳詩曰、夙駕尋清軌、遠遊越梁陳。

音決、泗音四。

劉良曰、遵、依也。淮③泗、二水名□。梁、漢④景帝弟所封国。陳、曹⑤植所封国。

李善曰わく、毛詩に曰わく、馬を駈ること悠々たり、と。陸機の（梁）陳に従う詩に曰わく、夙に駕して清軌を尋ね、遠遊して梁陳を越ゆ、と。

音決に、泗は音四、と。

劉良曰わく、遵は、依なり。淮泗は、二水の名なり。梁は、漢の景帝の弟の封ぜられし所の国なり。陳は、曹植の封ぜられし所の国なり、と。

［校勘］

○□　欠字。〈校勘各本〉にしたがって「梁」に改める。

○□　不明字。〈校勘各本〉この字無し。

［訳］

李善はいう、「『毛詩』に、『はるばると馬を走らせた』とある。陸機の「梁陳に従う」詩に、『朝早くに車に乗って、さわやかな道を行き、遠く旅して梁や陳の国を越えた』とある」と。

『音決』に、「泗は、音は四」とある。

劉良はいう、「遵は、依である。淮と泗は、二川の名である。梁は、漢の景帝の弟が封じられた国である。陳は、曹植が封じられた国である」と。

［注］

①**毛詩曰…**　『毛詩』鄘風「載馳」に、「駆馬悠悠、言至於漕。（馬を駆ること悠悠たり、言に漕に至れり）」と見える。底本は「駈」に作るが、これは「駆」の俗字。

②**陸機…**　陸機「呉王の郎中たりし時、梁陳に従いし作」（『文選』巻二十六）に見える。

③**淮泗**　淮水、泗水をさす。淮水は、黄河と長江の間を流れる第三の大河。現在の河南省、湖北省の境にある桐柏山地に発し、安徽省を貫流し、江蘇省の洪沢湖を経て大運河に入り、分流して黄海と長江に注ぐ。泗水は、淮河の一大支流であり、現在の山東省を流れる川。陪尾山に源を発し、西南に流れて孔子の生地である曲阜県を通り、独山湖に注ぐ。

④**漢景帝弟**　劉武（？～前漢、景帝、中元六年〔前一四四〕）をさす。文帝の子、景帝の弟。諡は孝。文帝十二年（前一六八）に梁（河南省東部）王に封ぜられた。伝は『漢書』巻四

十七。

⑤**曹植**　後漢、献帝、初平三年（一九二）～魏、明帝、太和六年（二三二）魏、沛国譙の人。字は子建。曹操の第三子、曹丕の弟。陳（河南省淮陽県）王に封ぜられ、死後、思と諡されたので陳思王と称される。幼少より文才に恵まれ、曹操に愛されたが、そのため曹丕とは不遇であったという。伝は『三国志』巻十九。

0910【服義追上烈　矯迹廁宮臣】

李善曰、楚辞曰、身服義而未沫。陸機従梁陳詩曰、在昔蒙嘉運、矯迹入崇賢。

呂向曰、服義、（服）古人義道也。上烈、謂枚乗・相如・劉楨・応瑒等。言我挙迹廁於数人之間也。

陸善経曰、上烈、先業也。

李善曰わく、楚辞に曰わく、身は義を服いて未だ沫まず、と。陸機の梁陳に従う詩に曰わく、在昔　嘉運を蒙り、迹を矯げて崇賢に入る、と。

呂向曰わく、義を服うとは、古人の義道（を服う）なり。上烈は、枚乗・相如・劉楨・応瑒等を謂う。言うこころは我れ迹を挙げて数人の間に廁るなり、と。

陸善経曰わく、上烈は、先業なり、と。

［校勘］

○**未沫**　「未深」〈国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○**呂向曰**　「良曰」〈校勘各本〉

○**義道**　「道義」〈校勘各本〉なお、底本は「古人」の上の「服」字を欠くが、各本に従って補う。

○**上烈**　「上列」〈校勘各本〉

○**間**　「門」〈建州本〉

○**也**　〈校勘各本〉この字無し。

［訳］

李善はいう、「『楚辞』に、『身は正しい道理にのっとって行っても、まだ十分ではない』とある。陸機の「梁陳に従う」詩には、『かつて幸福な巡り合わせに遇い、足を挙げて宮中に入り、崇賢門の中に入ることとなった』とある」と。

呂向はいう、「義を服うとは、古人のすぐれた事績（にのっとって行うこと）である。上烈は、枚乗・相如・劉楨・応瑒らのことをいう。つまり、ここは足を挙げて宮中に入り、数人の者たちの中に身を置くという意味である」と。

陸善経はいう、「上烈は、先人の事業である」と。

［注］

①**楚辞曰…**　『楚辞』招魂篇に、「朕幼清以廉潔兮、身服義而未沫。（朕幼きより清くして以て廉潔、身は義を服うこと未だ沫まず）」と見える。「服義」について、王逸は「言我少小修清潔之行、身服仁義、未曽有懈已之時也。（言うこころ

は我れ少小より清潔の行いを修め、身は仁義を服い、未だ曾て懈已の時有らざるなり）」と注するごとく、仁義を行うこと。「服」は、行う意であり、我が国の『楚辞』の和刻本は古くこれを「オコナフ」と訓ませている（足利本、慶安本『文選』も同じ）。なお、「沬」について、王逸は「沬、已也。（沬は、已むなり）」と注するが、「沬」にそのような義は無く、恐らくは「沫」と混同していよう。これについて、南宋・洪興祖の補注には、「沬、莫貝切。易曰、日中見沬。注云、沬、微昧之明也。一云、日中而昏也。（沬は、莫貝の切。易（下経「豊」九三）に曰わく、日中に沬を見る、と。（王弼）注に云う、沬は微昧の明なり、と。一（服虔）に云う、日中にして昏きなり、と）」とあるごとく、うす暗いさま、ほのかに暗いようす、の意であり、正しく「沬」の義を説いている。しかし、『文選』に収める『楚辞』招魂篇の李善注が王逸の注を引くことから、ここではその意向に従う。

②**陸機従梁陳詩曰…**　前出、陸機「呉王の郎中たりし時、梁陳に従いし作」に見える。「矯迹」は、足を高くあげて俗世を出ること。ここでは宮中に入る、出仕することをいう。「矯」は、「挙」に同じ。『楚辞』九章篇「惜誦」に、「矯茲媚以私処兮。（茲の媚を矯げて以て私処す）」とあり、王逸は、「矯、挙也。（矯は、挙なり）」と注する。また、李善注に引く孫放の詩に、「矯迹歩玄闈（迹を矯げて玄闈を歩む）」とある。「崇賢」は、崇賢門のこと。太子の宮殿の門。陸機はかつて太子洗馬としてここに出入りした。

③**枚乗**　？～前漢、孝元、後元三年（前一四一）字は叔。淮陰（江蘇省）の人。呉王劉濞の郎中であったが、後に枚乗は呉を去って梁へ行き、梁王劉武の上客となった。景帝の時には召されて弘農郡都尉となったが、賓客として各地を遊説し、病気と称して官を辞し、再び梁の賓客となった。賦や文章にすぐれていた。なお、『文選』には枚乗の作である「七発」が収められている（巻三十四）。伝は『漢書』巻五十一。

④**相如**　前漢、武帝元年？（前一七九）～元狩六年（前一一七）司馬相如。成都の人。字は長卿。景帝のときに武騎常侍となったが、官を辞して梁の孝王の食客となり従遊した。孝王の死後、成都に帰郷する際に、臨邛の富豪卓王孫の娘、卓文君と出会い駆け落ちした。辞賦にすぐれ、後に「子虚賦」が武帝の眼にとまると、召されて郎となり、官は中郎将、孝文園令と進んだが、病のため退いた。伝は『史記』巻一一七、『漢書』巻五十七。

⑤**劉楨**　？～後漢、献帝、建安二十二年（二一七）字は公幹。東平寧陽（山東省寧陽）の人。建安七子の一人。建安十三年（二〇八）、曹操の政権に入り、曹氏父子に仕えた。丞相（曹操）掾属、平原侯（曹植）庶子、五官将（曹丕）文学などを歴任し、建安文学の一翼を担った。梁・鍾嶸の『詩品』では、建安七子の中で最も高く評価されている。『劉公幹集』一巻。伝は『三国志』巻二十一。

⑥**應瑒**　？～後漢、献帝、建安二十二年（二一七）字は徳璉。汝南（河南省汝南県東南）の人。建安七子の一人。曹操に召されて丞相掾属となり、次いで平原侯庶子、五官将文学などを歴任した。伝は『三国志』巻二十一。

1112【朱黻咸髦士　長纓皆俊人】

李善曰、毛詩曰、朱茀斯皇、室家君王。鄭玄曰、茀者、諸侯黄朱。又曰、茀、太古蔽膝之象。黻与茀古字通。毛詩曰、髦士攸宜。陸機従梁陳詩曰、長纓麗且鮮。尚書曰、俊民用章。音決、黻音弗。

張銑曰、朱黻長纓、皆侍臣之服。髦亦俊也。

李善曰わく、毛詩に曰わく、朱茀 斯れ皇たり、室家の君王なり、と。鄭玄曰わく、茀とは、諸侯は黄朱なり、と。又た曰わく、茀は、太古 膝を蔽うの象なり、と。黻と茀とは古字通ず。毛詩に曰わく、髦士の宜しき攸なり、と。陸機の梁陳に従う詩に曰わく、長纓 麗にして且つ鮮やかなり、と。尚書に曰わく、俊民用て章らかなり、と。音決に、黻は音弗、と。

張銑曰わく、朱黻長纓は、皆な侍臣の服なり。髦も亦た俊なり、と。

［校勘］

○**毛詩曰髦士攸宜**　〈校勘各本〉「髦士」の先行用例として、此の条の上に「毛詩曰烝我髦士」（小雅「甫田」）を挙げ、「又曰」として「髦士攸宜」（大雅「棫樸」）を挙げる。

○**俊民**　「俊人」〈国子監本・明州本〉

［訳］

李善はいう、「『毛詩』に、『朱い膝かけは光り輝いており、将来王室の君主となり王となるお方である』とある。これについて鄭玄は、『茀は、諸侯は黄色を帯びた朱色のものを身につける』という。さらに鄭玄は、『茀は、古の時代は膝を蔽うものであった』と説いている。「黻」と「茀」は古字では通訓である。『毛詩』に、『俊英な士にふさわしい』とある。陸機の「梁陳に従う」詩には、『冠の長いひもは美しく、そのうえ鮮やかであった』とある。『尚書』には、『すぐれた民はきちんと世にあらわれる』とある」と。

『音決』に、「黻は、音は弗」とある。

張銑はいう、「朱黻・長纓は、いずれも侍臣の身につける服である。髦も同じく俊の意である」と。

［注］

①**毛詩曰…**　『毛詩』小雅「斯干」に、「其泣喤喤、朱芾斯皇、室家君王。（其の泣くこと喤喤たり、朱芾斯れ皇たり、室家の君王なり）」と見える。詩序は「斯干、宣王考室也。（斯干は、宣王 室を考すなり）」といい、宣王が新宮を成したことを歌った詩であるとし、鄭玄は「室家、一家之内。宣王所生之子、或且為天子、或且為諸侯。皆将佩朱芾煌煌然。（室家は、一家の内なり。宣王の生む所の子は、或いは且つ天子と為り、或いは且つ諸侯と為る。皆な将に朱芾煌煌然たるを佩びんとす）」（『毛詩鄭箋』巻十一）と注する。なお、「朱芾

斯皇」の句は、『毛詩』小雅「采芑」にも見える。

②**鄭玄曰…**　同じく「斯干」の鄭注に、「芾者、天子純朱、諸侯黄朱。（芾とは、天子は純朱にして、諸侯は黄朱なり）」と見える。「芾」は、『説文解字』（巻七下）では「市」に作り、「韠也。上古衣蔽前而已。市以象之。天子朱市、諸侯赤市、大夫葱衡。（韠なり。上古、衣は前を蔽うのみ。市は以て之に象る。天子は朱市、諸侯は赤市、大夫は葱衡なり）」と説く。帯から巾が垂れている形で、古は礼装用のひざかけとして用いられていた。『毛詩』曹風「候人」にも、「彼其之子、三百赤芾。（彼の其れ之の子、三百の赤芾）」と見え、『毛伝』は「芾は、韠なり」と注する。

③**又曰…**　『毛詩』小雅「采菽」の「赤芾在股、邪幅在下。（赤芾は股に在り、邪幅は下に在り）」の鄭注に、「芾、大古蔽膝之象也。冕服謂之芾。其他服謂之韠。以韋為之。其制上広一尺、下広二尺、長三尺、其頸五寸、肩革帯博二寸。（芾は、大古、膝を蔽うの象なり。冕服之を芾と謂い、其の他の服之を韠と謂う。韋を以て之を為る。其の制、上の広さは一尺、下の広さは二尺、長さは三尺、其の頸は五寸、肩と革帯との博さは二寸なり）」と見える。この注は『礼記』玉藻篇に、「韠、君朱、大夫素、士爵韋。……韠、下広二尺、上広一尺、長三尺、其頸五寸、肩革帯博二寸。（韠は、君は朱、大夫は素、士は爵韋。……韠は、下の広さは二尺、上の広さは一尺、長さは三尺、其の頸は五寸、肩と革帯との博さは二寸）」とあるのを援用したもの。

④**黻与茀古字通**　「芾」「茀」「韠」「蔽」「紱」は、いずれも通訓。たとえば、唐・陸徳明『経典釈文』巻六、小雅「采芑」の「朱芾」に、「本又作芾、或作紱。音弗。下篇赤茀同。（本又た芾に作り、或いは紱に作る。皆な音は弗、下篇の赤茀も同じ）」と注するのはその証左となろう。

⑤**毛詩曰…**　『毛詩』大雅「棫樸」に、「済済辟王、左右奉璋、奉璋峨峨、髦士攸宜。（済済たる辟王、左右に璋を奉ず、璋を奉ずること峨峨たり、髦士の宜しき攸なり）」と見え、『毛伝』は「髦、俊也。（髦は、俊なり）」と注し、鄭玄は「士、卿士也。（士は、卿士なり）」と説く。

⑥**陸機従梁陳詩曰…**　前出、陸機「呉王の郎中たりし時、梁陳に従いし作」に、「軽剣払磐厲、長纓麗且鮮。（軽剣は磐厲を払い、長纓は麗にして且つ鮮やかなり）」とある。「長纓」は、冠の長い紐。

⑦**尚書曰…**　『尚書』周書「洪範」に、「曰、王省惟歳、卿士惟月、師尹惟日。歳月日時無易、百穀用成、乂用明、俊民用章、家用平康。（曰わく、王の省るは惟れ歳、卿士は惟れ月、師尹は惟れ日なり。歳・月・日の時 易わること無くんば、百穀用て成り、乂用て明らかに、俊民用て章らかに、家用て平康なり）」とある。「俊民」は、すぐれた人々。賢臣。なお「俊民」の語は、『尚書』周書「多士」、「君奭」にも見える。

1314【契闊承華内　綢繆踰歳年】

李善曰、陸機従梁陳詩曰、誰謂伏事浅、契闊踰三年。又赴洛詩曰、託身承華側。李陵詩曰、与子結綢繆。
音決、契、苦結反。
李周翰曰、契闊、勤苦也。承華、太子門名。綢繆、纏綿也。踰、越也。言見顧遇越於歳年也。

李善曰わく、陸機の梁陳に従う詩に曰わく、誰か謂わん事に伏すること浅しと、契闊して三年を踰ゆ、と。又た洛に赴く詩に曰わく、身を承華の側に託す、と。李陵の詩に曰わく、子と綢繆を結ばん、と。
音決に、契は、苦結の反、と。
李周翰曰わく、契闊は、勤苦なり。承華は、太子の門の名。綢繆は、纏綿なり。踰は、越なり。言うこころは顧遇せられて歳年を越ゆるなり、と。

［校勘］
○**誰謂伏事浅**　〈校勘各本〉この五字無し。
○**託身承華側**　「記身承華側」〈国子監本・秀州本〉
○**顧遇**　「顧過」〈校勘各本〉
○**歳年**　「歳華」〈建州本〉
○**也**　〈校勘各本〉この字無し。

［訳］
李善はいう、「陸機の「梁陳に従う」詩には、『いったい誰が太子にお仕えしたことが浅く短かったなどと思おう、骨を折り勤勉に仕えることすでに三年を越えた』とある。さらに「洛に赴く」詩には、『わが身を承華門のほとりにおいた』とある。李陵の詩に、『君と深い友情を結ぼう』とある」と。
『音決』には、「契は、苦結の反」とある。
李周翰はいう、「契闊は、心を尽くして勤め苦労することである。承華は、太子の門の名である。綢繆は、心にまとわりついて離れないさまである。踰は、越えることである。つまり、ここは太子に深く重んじられて歳月を過ごしたという意味である」と。

［注］
①**従梁陳詩…**　前出、陸機「呉王の郎中たりし時、梁陳に従いし作」に見える。「伏事」は、ここでは太子に仕えること。「契闊」は、心を尽くして勤め苦しむこと。『毛詩』邶風「擊鼓」に、「死生契闊、与子成説。（死生契闊、子と説を成せり）」とあり、『毛伝』は、「契闊、勤苦也。（契闊は、勤苦なり）」と注する。
②**赴洛詩…**　陸機「洛に赴く　二首」（『文選』巻二十四）其二に、「羈旅遠遊宦、託身承華側。（羈旅して遠く遊宦し、身を承華の側に託す）」と見える。「承華」は、東宮の門。このとき陸機は太子洗馬の職にあった。
③**李陵詩…**　李陵（少卿）「蘇武に与う　三首」其二（『文選』巻二十九）に、「独有盈觴酒、与子結綢繆。（独り觴に盈つる酒のみ有り、子と綢繆を結ばん）」とある。「綢繆」は、まとわりつくさま。転じて仲睦まじいさまをいう。「纏綿」

に同じ。古くは『毛詩』唐風「綢繆」に、「綢繆束薪、三星在天。（綢繆として薪を束ぬ、三星 天に在り）」とあり、『毛伝』は、「綢繆、猶纏綿也。（綢繆は、猶お纏綿のごときなり）」と注する。

15
16【日暮聊総駕　逍遥観洛川】

李善曰、陸機苔張士然詩曰、余固水郷士、総轡臨清川。
呂延済曰、総駕、停車也。洛川、洛水。

李善曰わく、陸機の張士然に苔うる詩に曰わく、余は固より水郷の士、轡を総びて清川に臨む、と。
呂延済曰わく、駕を総ぶは、車を停むるなり。洛川は、洛水なり、と。

［校勘］
○**洛水**　「洛水也」〈校勘各本〉

［訳］
李善はいう、「陸機の「張士然に苔う」詩には、『私はもともと水郷の呉の人間なので、馬の手綱を結び清らかな川に臨んだ』とある」と。
呂延済はいう、「駕を揔ぶというのは、馬車を停めることである。洛川は、洛水のことである」と。

［注］
①**逍遥**　自由にさまよう。ぶらぶら歩く。『楚辞』離騒篇に、「折若木以払日兮、聊逍遥以相羊。（若木を折りて以て日を払い、聊く逍遥して以て相羊せん）」とある。王逸は「逍遥・相羊、皆遊也。（逍遥・相羊は、皆な遊ぶなり）」と注し、洪興祖は「逍遥、猶翺翔也。相羊、猶徘徊也。（逍遥は、猶お翺翔するがごときなり。相羊は、猶お徘徊するがごときなり）」と注する。なお、「逍遥」を「須臾」に作るテクストもある。
②**苔張士然詩…**　陸機「張士然に苔う」（『文選』巻二十四）に、「余固水郷士、総轡臨清淵。（余は固より水郷の士、轡を総びて清淵に臨む）」と見え、原詩では「清川」を「清淵」に作る。ここでいう「水郷」は、その李善注に、「水郷、謂呉也。（水郷は、呉を謂うなり）」とあるごとく、陸機の故郷である呉の地をさす。
③**総駕**　従来、たづなをとって馬車を走らせる意と解しているが、ここは五臣注において呂延済が説くように、馬のたづなをつなぐ、馬車をとどめる意と解する。これは先の陸機「張士然に苔う」も同様である。一例をあげるならば、『楚辞』離騒篇に、「飲余馬於咸池兮、総余轡乎扶桑。（余が馬に咸池に飲い、余が轡を扶桑に総ぶ）」とあり、王逸は「総、結也。（総は、結なり）」と注する。恐らくは呂延済の注もこれに拠るものであろう。また、『楚辞』の句は先の「折若木以払日兮、聊逍遥以相羊」と続いており、注釈には指摘されて

いないが、本文がこの表現を踏まえていることは明白である。なお、底本は「捻」に作るが、これは「総」の俗字。

1718【徂没多拱木　宿草淩寒烟】

李善曰、公羊伝曰、秦伯謂蹇叔曰、若尓之年者、塚上之木拱矣。礼記、曾子曰、朋友之墓有宿草、而不哭焉。

劉良曰、徂、往也。拱木、合手之木也。宿草、陳根也。行役在路、但見墳墓、拱木宿草犯寒烟而已。

陸善経曰、言徂没者、年已深遠、墳多拱抱之木、宿草森疎、上淩寒烟。今案五家本没為役也。

李善曰わく、公羊伝に曰わく、秦伯　蹇叔に謂いて曰わく、尓の若きの年は、塚上の木は拱ならん、と。礼記に、曾子曰わく、朋友の墓に宿草有るときは、而ち哭せず、と。

劉良曰わく、徂は、往くなり。拱木は、合手の木なり。宿草は、陳根なり。行役して路に在り、但だ墳墓を見れば、拱木宿草、寒烟を犯すのみ、と。

陸善経曰わく、徂没と言うは、年已に深遠にして、墳に拱抱の木多く、宿草森疎として、上は寒烟を淩ぐなり。今案ずるに、五家本は没を役と為すなり、と。

［校勘］

○**若尓之年者**　「爾之年」（「若」「者」字無し）〈校勘各本〉

○**朋友之墓**　「朋友之暮」〈国子監本・明州本〉

［訳］

李善はいう、「『公羊伝』に、『秦伯が蹇叔に、そなたのごとき年齢（普通の寿命を迎えていたら）では、もうとっくに墓の上の木は両手で抱えるほどの大きさになっていることだろうといった』とある。また『礼記』には、『曾子は、友人の墓にお参りして宿草が生えていたら、声をたてて泣くことはしないといった』とある」と。

劉良はいう、「徂は、往くことである。拱木は、両手で抱えるほどの大きさの木である。宿草は、古い草木の根である。遠く旅をして路の途中で、ただ墳墓を見てみると、あたりには拱木や宿草が、冷たいもやの中に生えているだけであったということである」と。

陸善経はいう、ここで「徂没」といっているのは、すでに長い歳月を経て、墓のまわりには両手で抱えるほどの木が多く立ち並び、また宿草が生い茂って、上のほうは冷ややかなもやをこえて伸びているからである。今調べてみると、五臣本は没を役としている」と。

［注］

①**公羊伝曰…**　『春秋公羊伝』僖公三十三年「夏四月辛巳、晋人及姜戎敗秦于殽。（夏四月辛巳、晋人 姜戎に及びて秦を殽に敗る）」の条の伝に、「秦伯怒曰、若爾之年者、宰上之木拱矣。（秦伯怒りて曰わく、爾が年の若きは、宰上の木は拱

ならん、と）」とあり、何休は「拱、可以手対抱。（拱は、以て手の対抱すべし）」と注する。「拱木」は、両手で抱えるほどの大きさの木。大木をいう。ここでは、墓に植えた木が歳月を経て大木になること、すなわち死後年月が経つことをさす。また、『春秋左氏伝』僖公三十二年「冬十有二月己卯、晋侯重耳卒。（冬十有二月己卯、晋侯重耳卒す）」の条の伝にも、「公使謂之曰、爾何知。中寿爾墓之木拱矣。（公 之に謂わしめて曰わく、爾何をか知らん。中寿ならば爾が墓の木は拱ならん）」とあり、杜預は、「合手曰拱。言其過老、悖不可用。（合手を拱と曰う。其の老を過ぎ、悖として用うべからざるを言う）」と注する。なお、「拱木」の語は、江淹「恨の賦」（『文選』巻十六）にも、「試望平原、蔓草縈骨、拱木斂魂。（試みて平原を望み、蔓草 骨に縈わり、拱木 魂を斂む）」と見える。これについて李善注は『左伝』僖公三十二年の条を引き、五臣では呂向が「淹望見平原陵墓、蔓延之草合拱之木、縈遶人骸骨、有如聚斂魂魄於是中也。（淹 平原の陵墓を望見するに、蔓延の草・合拱の木、人の骸骨を縈遶して、魂魄を是の中に聚斂するが如きこと有るなり）」と注する。

②**礼記**… 『礼記』檀弓篇上に見える。鄭玄は「宿草、謂陳根也。（宿草は、陳根を謂うなり）」と注する。「宿草」は、前年の根から生えた草、すでに一年以上経っている草のことで、総じて墓地に生える草をいう。

19 20【□子易感愾　躑躅還自憐】

李善曰、劉公幹詩曰、乖人易感動。陸機道中詩曰、佇立望故郷、顧影悽自憐。

音決、易、以智反。慨、可代反。躑、直亦反。躅、直録反。

呂向曰、遊客感此拱木宿草易為慨歎。躑躅、不安貌。自憐、自哀憐。

李善曰わく、劉公幹の詩に曰わく、乖人は感動し易し、と。陸機の道中の詩に曰わく、佇立して故郷を臨み、影を顧みて悽として自ら憐む、と。

音決に、易は、以智の反。慨は、可代の反。躑は、直亦の反。躅は、直録の反、と。

呂向曰わく、遊客 此の拱木宿草に感じて慨歎を為し易し。躑躅は、不安の貌。自ら憐むは、自ら哀憐するなり、と。

［校勘］

○**乖人**　「平人」（国子監本・明州本・秀州本・建州本）

○**感動**　「感慟」（校勘各本）

○**躑躅**　「躑躅」（校勘各本）以下同じ。

［訳］

李善はいう、「劉公幹の詩に、『親友と離れている我が身は、とかく心を動かされやすい』とある。また陸機の「道中」の詩に、『たたずんで故郷のあるほうを眺めたり、自分の影をふり返って、痛ましく我が身を憐れむのである』とある」と。

『音決』に、「易は、以智の反。慨は、可代の反。躑は、直亦の反。躅は、直録の反」とある。

呂向はいう、「旅人が墓に生えている拱木や宿草に心を動かされて憂いの情を起こしやすいのである。躑躅は、落ちつかない様子である。自ら憐むは、自ら我が身を悲しく憐れむことである」と。

［注］

①**劉公幹詩**…　劉公幹（楨）「徐幹に贈る」（『文選』巻二十三）に、「乖人易感動、涕下与衿連。（乖人　感動し易く、涕下りて衿と連なれり）」と見える。「乖人」は、孤独の人、離人をいう。「乖」は、『説文解字』に、「乖、戾也。（乖は、戾（もと）るなり）」とあるごとく、背く、の意、またそこから転じて、離れる、別れる、の意となる。

②**陸機道中詩**…　前出、陸機「洛に赴く道中の作　二首」其一に見える。

2122【願言寄三鳥　離思非徒然】

李善曰、楚辞曰、三鳥飛以自南、覧其志而欲北。願寄言於三鳥兮、去飄疾而不得。陸機赴洛詩曰、感物恋堂室、離思一何深。

音決、思、息自反。

張銑曰、三鳥者、楚詞本属当時所見、無定名也。言我寄言此鳥、申其離思。豈空然哉也。

李善曰わく、楚辞に曰わく、三鳥飛びて以て南よりし、其の志を覧て北せんと欲す。言を三鳥に寄せんことを願うも、去ること飄疾にして得ず、と。陸機の洛に赴く詩に曰わく、物に感じて堂室を恋ひ、離思一に何ぞ深き、と。

音決に、思は、息自の反、と。

張銑曰わく、三鳥とは、楚詞は本より当時の見る所を属し、定名無きなり。言うこころは我れ言を此の鳥に寄せて其の離思を申ぶ。豈に空しく然らんや、と。

［校勘］

○**飄疾**　「飈疾」〈校勘各本〉

○**也**　〈校勘各本〉この字無し。

［訳］

李善はいう、「『楚辞』に、『三鳥が南から飛んできた。鳥の意向をよく観察すると北へ向かおうとしている。そこでわが言葉をあの三鳥にことづけようと願ったが、風のように速く飛び去ってとてもかなわなかった』とある。陸機の「洛に赴く」詩には、『風物に心動かされて母や妻が恋しく、この離別の思いはなんと深いことか』とある」と。

『音決』には、「思は、息自の反」とある。

張銑はいう、「この三鳥について、『楚辞』はもとより当時たまたま目についたものをつづっただけで、それにはとくに

定まった名前など無いのである。つまり、言葉を三鳥にことづけて離別の思いを述べたのである。その思いはどうして空しいものであろうか（深く果てしないものなのである）」と。

［注］

①**非徒然**　徒らに然るに非ず。（離別の堪え難い思いは）むなしくそのように湧き起こるものではない。つまり、感情が切実であり、尋常ではないこと。張銑はこれを「豈に空しく然らんや」と置き換えて注する。

②**楚辞曰…**　『楚辞』九歎篇「憂苦」に、「三鳥飛以自南兮、覧其志而欲北。願寄言於三鳥兮、去飄疾而不可得。（三鳥飛びて以て南よりし、其の志を覧て北せんと欲す。言を三鳥に寄せんことを願うも、去ること飄疾にして得べからず）」とあり、王逸は「言已在於湖沢之中、見三鳥飛従南来、観察其志、欲北渡江縦恣自在也、自傷不得北帰、曽不若飛鳥也。（言うこころは已に湖沢の中に在り、三鳥の飛びて南より来るを見、其の志を観察するに、北のかた江を渡り縦恣自在ならんと欲するや、自ら北に帰るを得ずして、曽て飛鳥の若くならざるを傷むなり）」、また「言已既不得比帰、願因三鳥飛、寄善言以遺其君。去又急疾而不可得、心為結恨也。（言うこころは已に既に北に帰るを得ずして、三鳥の飛ぶに因りて、善言を寄せて以て其の君に遺らんことを願うも、去ること又た急疾にして得べからず、心為に恨みを結ぶなり）」と説く。

③**陸機赴洛詩曰…**　前出、陸機「洛に赴く　二首」其一に見える。「離思」は、家族や両親などが離ればなれにいる人への悲しい思い。その先行用例としては、曹植の「雑詩　六首」（『文選』巻二十九）其一に、「方舟安可極、離思故難任。（舟を方ぶるも安んぞ極るべき、離思故に任え難し）」と見えており、恐らくは陸機もこの表現を踏まえていよう。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程）